

目次

口絵

序

第一章

はじめに

一 津守一門と家系

(一) 神官

(二) 歌人

(三) 芸能

(四) 出家

(五) 官職

二 住吉明神の使命

(一) 海上の守護神

(二) 和歌の守護神

A 平安時代

B 鎌倉時代

(イ) 和歌衰退の懸念

(ロ) 憂世救済の和歌

(ハ) 歌道守護の懇願

C 南北朝時代

D 室町時代

(イ) 歌神への尊崇

(ロ) 歌神への願

E 江戸時代

(イ) 歌神への尊崇と感謝

(ロ) 歌神への願

(ハ) 歌神と平和

(三) 国の守護神

A 平安時代

B 鎌倉時代

C 南北朝時代

D 室町時代

E 江戸時代

三 住吉と和歌

(一) 住吉和歌の時代別分布

(二) 自然的素材の時代別分布

目次

(二)自然的素材と住吉和歌……………七

 奈良時代……………七

 I 春の歌……………七

 A 平安時代……………七

 B 鎌倉時代……………七

 C 南北朝時代……………八

 D 室町時代……………八

 E 江戸時代……………八

 II 夏の歌……………八

 A 平安時代……………八

 B 鎌倉時代……………九

 C 南北朝時代……………九

 D 室町時代……………九

 E 江戸時代……………九

 III 秋の歌……………九

 A 平安時代……………九

 B 鎌倉時代……………九

 C 南北朝時代……………一〇

 D 室町時代……………一〇

 E 江戸時代……………一〇

 IV 冬の歌……………一〇

 A 平安時代……………一〇

 B 鎌倉時代……………一〇

 C 南北朝時代……………一一

 D 室町時代……………一一

 E 江戸時代……………一一

四 住吉と歌人——人生的素材の形象化……………二九

 (一)住吉詣歌……………二九

 A 平安時代……………二九

 B 鎌倉時代……………三〇

 C 南北朝時代……………三〇

 D 室町時代……………三〇

 E 江戸時代……………三〇

 (二)沈淪歌……………三五

 (三)述懐歌……………三五

 A 平安時代……………三六

 B 鎌倉時代……………三六

 C 南北朝時代……………三六

第二章

一 津守家九歌人生存時代概観……………一七

 A 平安時代 (国基生存時代)……………一七

 (イ)政治……………一七

 (ロ)経済……………一八

 (ハ)宗教……………一八

 (ニ)文学……………一八

 B 鎌倉・南北朝・室町〈初期〉時代 (津守八歌人生存時代)……………一八

 (イ)政治……………一八

 (ロ)宗教……………一九

 (ハ)文学……………一九

 (ニ)国基……………二〇

 (イ)経国……………二〇

 (ロ)国平……………二〇

 (ハ)国助……………二五

 (ニ)国冬……………二七

 (イ)国道……………二七

 (ロ)国夏……………二九

 (ハ)国量……………二九

 (ニ)国博……………三三

 (イ)津守家歌人年譜……………三三

 (ロ)国基の和歌……………三九

 (ハ)家集について……………三九

 (ニ)家集の成立時……………三九

 (イ)歌の配列……………四〇

 (ロ)四季歌の題詠……………四一

 B 形式上の問題……………四五

 (イ)字余……………四五

 (ロ)句切……………四五

 (ハ)修辭……………四五

 C 内容上の問題……………四六

 (イ)素材の範圍……………四六

 (ロ)表現の手法……………四六

二 津守家歌人の伝記……………二〇

 (一)伝記……………二〇

 (イ)国基……………二〇

 (ロ)経国……………二〇

 (ハ)国平……………二〇

(二)津守家八歌人の和歌……………五〇〇

 A 勅撰集の変遷……………五〇〇

 B 津守家八歌人の歌風……………五〇四

 歌姿・声調……………五〇七

 C 形式上の問題……………五二七

 (イ)字余……………五二七

 (ロ)句切……………五二九

 (ハ)修辭……………五三三

 D 内容上の問題……………五三三

 古典憧憬……………五三三

 (イ)本歌取の態度(形式上)……………五三六

 (ロ)本歌取の表現技法……………五三七

 (ハ)素材の範囲……………五三九

第三章

一 津守家歌人の和歌活動……………六二

(一)勅撰集載録の和歌……………六二

 (1)後拾遺和歌集……………六二

 (2)金葉和歌集……………六三

 (3)詞花和歌集……………六三

(4)千載和歌集……………六三

(5)新古今和歌集……………六三

(6)新勅撰和歌集……………六三

(7)続後撰和歌集……………六三

(8)続古今和歌集……………六三

(9)続拾遺和歌集……………六四

(10)新後撰和歌集……………六五

(11)玉葉和歌集……………六七

(12)続千載和歌集……………六八

(13)続後拾遺和歌集……………六三

(14)風雅和歌集……………六四

(15)新千載和歌集……………六五

(16)新拾遺和歌集……………六三

(17)新後拾遺和歌集……………六三

(18)新続古今和歌集……………六四

(19)新葉和歌集……………六六

(二)私撰集載録の和歌……………六六

 (1)和歌一字抄……………六六

 (2)続詞花和歌集……………六六

(四)歌合出詠の歌……………六六

(3)新撰朗詠集……………六六

(4)夫木和歌抄……………六六

(5)万代和歌集……………六六

(6)明玉集……………六六

(7)雲葉和歌集……………六六

(8)拾遺風体和歌集……………六六

(9)藤葉和歌集……………六六

(10)続現葉和歌集……………六六

(11)臨永和歌集……………六六

(12)後葉和歌集……………六六

(三)私家集載録の和歌……………六六

 (1)六条修理大夫集……………六六

 (2)散木奇歌集……………六六

 (3)江帥集……………六六

 (4)帥大納言集……………六六

 (5)伯母集……………六六

 (6)如願法師集……………六六

 (7)藤原隆祐朝臣集……………六六

 (8)草庵集……………六六

(1)新時代不同歌合(下)……………六六

(2)康平六年十月三日丹後守公基歌合……………六六

(3)延久四年三月十九日能登守通宗気多宮歌合……………六六

(4)寛治五年八月廿三日左近権中将藤原宗通朝臣家歌合……………六六

(5)寛治五年十月十三日従二位親子草子合……………六六

(6)禁裡本住吉社歌合……………六六

(7)禁裡本玉津島歌合……………六六

(8)禁裡本歌合類聚……………六六

(9)影供歌合……………六六

(10)内裏九十番御歌合……………六六

 其の他……………六六

 (1)袋草紙……………六六

 (2)桑華蒙求……………六六

 (3)住吉社松葉大記……………六六

 (4)和歌口伝……………六六

 (5)昭慶門院御屏風押色紙和歌……………六六

 (6)元徳二年三月廿七日比叡山大講堂供養……………六六

(7) 太平記四…………… 六五〇

(8) 集外三十六歌仙…………… 六五〇

(五) 百首歌…………… 六五一

(1) 嘉元仙洞御百首…………… 六五一

(2) 津守国冬祈雨百首…………… 六五二

(3) 津守国冬朝臣和歌…………… 六五三

(4) 文保御百首…………… 六五七

(5) 詠百首和歌…………… 六五五

其の他…………… 六六一

(1) 津守国冬五十首…………… 六六一

(2) 花十首寄書…………… 六六三

二 津守家と歌の時代相…………… 六六五

(A) 国基の和歌…………… 六六五

(B) 津守家八歌人の和歌…………… 六六一

(1) 経国…………… 六六一

(2) 国平…………… 六六一

(3) 国助…………… 六六二

(4) 国冬…………… 六六三

第四章

(5) 国道…………… 六九四

(6) 国夏…………… 六九四

(7) 国量…………… 六九六

(8) 国博…………… 六九七

(イ) 崇神の歌・崇仏の歌…………… 六九七

(ロ) 忠誠の歌…………… 七〇三

(ハ) 憂国の歌…………… 七〇六

(ニ) 和歌神の歌…………… 七〇九

一 津守和歌集の本文並びに研究…………… 七五

——加賀本津守集と武田本津守和歌集——

(一) 武田本津守和歌集の編集者と成立時…………… 七六

(二) 加賀本津守集の編集者と成立時…………… 七三

(三) 編集…………… 七三

(四) 脱落・誤字…………… 七四

(五) 歌人名、其の他…………… 七五

(六) 勅撰集に於ける津守家の歌人…………… 七六

(七) 津守家と歌集の特色…………… 七七

津守和歌集——翻刻と校合——…………… 七元

群書類従本津守国基集…………… 七四

付録 津守氏古系図…………… 七五

あとがき…………… 七五

一 津守一門と家系

『津守氏古系図』（住吉大社権宮司津守通秀氏所感）によると、津守氏は天孫天津彦々火瓊々杵尊の後裔で神別の貴族である。『住吉社松葉大記』に「津守氏神功皇后撰政十一年辛卯大神鎮座当地呼地称真住吉命氏号津守云々」とあり、『津守氏古系図』の手搓足尼の左註に「日本紀作田蓼見宿禰母紀直等祖宇治彦之女子鹿嶋姫也。奉仕穴戸豊浦宮御宇天皇（仲哀天皇）御世皇后雙御坐熊襲国平賜之時又皇后筑紫權日宮御坐新羅国向賜是二時之天皇御世新羅国征平賜而還上坐余時人神詔我欲住処沼名椋長岡崎詔余時天皇詔此地誰知問賜手搓足尼答申今問賜地者手搓足尼侍処奉申賜余時皇后宣然者汝手搓為神主大此神者可齋祀宣賜已足以沼名椋長崎社定奉大神齋祀来余時以大神之命賜名住吉從此余時泊船掌内矣取大神祭日自此始賜津守姓大神齋祀」とある。神功皇后の新羅征戰

の際功臣として奉仕した手搓足尼（日本書紀では田蓼見宿禰）が功賞によって神功皇后より住吉明神の神主に任ぜられた事情が諒解され、この時津守家の住吉大社世襲の神主が誕生したのである。

津守の語義は「津を守る」の意で、航海の守護神として神靈を崇められた住吉明神に奉仕した故をもって、神主の職にありながら海外にも派遣されている。即ち、欽明紀四年一月には津守連山部は百済国に使し、皇極元年二月二日には津守連大海は高麗に、同五年には津守已麻奴跪が百済に派遣され、斉明紀五年七月三日には津守連吉祥は遣唐使に随行、光仁天皇宝龜九年一月津守宿禰國麻呂が遣唐使に同行、称徳天皇神護景雲二三年に神主男足が渤海国に、派遣されている（系図の左注には不還来とある）など外交の面でも発展していることを考える時、津守氏の活動は国内のみならず海外にまで及んでいたことがわかる。更に津守氏はただ神官だけでなく

く、歌道、芸能、仏教、京官、地方官の官職に従う者が多くなつた。以下津守家一門の概略を探ってみよう。

本稿に取扱う年時は、津守家の始祖火明命一七世の孫手搓足尼が仲哀天皇九年（300）九月に住吉明神の神主に任ぜられてから、七五代神主津守恒磨の明治九年（876）（この年については後述する）まで神主七五代、年数一六七六年間の家系を前述の『津守氏古系図』（写本）を中心に、書陵部所蔵『津守氏系図』（写本）、内閣文庫所蔵『津守氏系図』（写本）、続群書類聚本『住吉社神主并一族系図』（活版）、『武田本津守和歌集』（活版）其他の文献を参照して調査したものである。

（系図後掲）

（一）神官

『津守氏古系図』に示す如く、津守の姓を賜わり住吉大社神主第一代は手搓足尼（前述）で、ここに津守家の基礎が出来たのである。第二代は手搓足尼の子豊吾田で、軽嶋明宮御坐品太天皇（応神天皇）の御代に住吉大社神主を拝命し、特に難波大隅宮に大長蛇が潜入した時に豊吾田が退治したことで、帝から勇猛健雄の者と称せられた神主であった。

三代以下は神主名と歴代の天皇を示す

- 三代 的（豊吾田男） 難波高津宮天皇（仁徳天皇）
- 四代 平己志（的男） 磐余若椋宮天皇（履中天皇）、遠飛鳥天皇（允恭天皇）の二代
- 五代 百濟（平己志男） 石上穴穗宮天皇（安康天皇）、長谷瀬朝椋宮天皇（雄略天皇）の二代
- 六代 許磨（百濟男） 泊瀬雙木宮天皇（武烈天皇）
- 七代 乎色（許磨男） 磐余玉穗宮天皇（継体天皇）、勾金橋宮天皇（安閑天皇）の二代
- 八代 倭（乎色男） 檜隈廬入野宮天皇（宣化天皇）
- 九代 山部（倭男） 志貴嶋宮天皇（欽明天皇）